

選句 「主に養われる群れ、御手の内にある羊。今日こそ、主の声に聞き従はねばならない」(7節)。

- 1、この詩編はユダヤ教の伝承によれば、新年にエルサレムの神殿にきた巡礼者に呼び掛けられた言葉であったといわれています。1-2節は祭司が「主に向かって喜び歌おう」など、呼び掛ける4つの命令文によって構成されています。それに対して巡礼者は音楽に合わせて、3節から5節の信仰の告白、神への賛美を高らかに唱和したと思われます。招きと応答のはっきりした詩編です。「深い地の底も」(4)「山々の頂きも」(5)は、古代人がこのような場所には諸々の霊力が働く所として恐れていたことが前提にあります。しかしその場所も「御手のうちに」あって主のものだという信仰の表明です。現代的に言えば、主体的、意志的な生き方を阻むような、「観念への閉じ込め」をもたらす得体のしれにない領域(世間、情報操作、迷信)などはないのだ、と力強く告白がされています。新約聖書でいえば「体を殺しても魂を殺すことのできない者どもを恐れるな」(マタイ10:28)と通じるところがあります。「陸も」これは原文では「乾いた地」です。出エジプトの紅海脱出の時、エジプト軍にかこまれた絶対絶命の時、神が切り開いた乾いた地のことです(出エジプト14:10以下)。恐らく「天地の創り主」という信仰よりもあの「解放の神」が強く思い起こされたのです。6節はムスリム(イスラム教徒)のように平伏して礼拝した様子がうかがえます。
- 2、7節-11節は神殿で語られた神の託宣です。「今日こそ主の声に聞き従わねばならない」と決断が迫られます。「メリバやマサ」(荒野で水を求めた民の不信に、途方に暮れるモーセに主が岩を打たせて水を与えた話、主を試みる民の頑なさを象徴する。出17:1-7)の古事は申命記では繰り返し言及されます(申20:9-13)。「40年の間、心の迷う民と呼んだ」(10)という歴史の暗部をもつ民です。しかし、つぶやきを聞き続ける神がいまします。つぶやきを記憶して、悔いて、主に聞き従う決断をすることが、「今」を自覚させる。「主に養われる群れ、御手の内にある羊」の自覚があって初めて、悔いをかたることができる。「心を頑にしたはならない」。羊と羊飼いのイメージは旧約の大切なイメージである(詩編23:1, 28:9, 74:1, 77:21, 78:52-53, 79:13, 80:2, 95:7, 100:3)。巡礼者の日常はつぶやきの多い日々であったであろう。新年の初め、そのつぶやきを、神の御前に進み出て、そしてゆだねて、区切りをつけて、整え歩み始める時(カイロス)とする詩編である。新年という時の巡り(クロノス=時計が刻む時)を、決断の時(カイロス=機会、好機、出会いの時、神との関わりの時)とするのがキリスト者の信仰であろう。
- 3、「下の子が学校に行けなくなり、発達障害と診断されました。もっと早く気が付いてあげればなどと悔やみますが、主の栄光が現れされるためとの御言葉を信じています」。かつて私が牧師をしていた教会の教会学校で育った方からの年賀状でした。クロノスでの悔いをカイロスに変えて生き始められた証しのこの添え書きが心に染みました。